2014 9/23
No.1979
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
―神奈川政経懇話会―

横須賀市秋谷の円乗院で８日、「へちま加持」が行われた。災いや願い事を託す譲渡之証が巻かれたヘチマが積み上げられ、副住職が祈禱（きとう）を始めると訪れた人たちは一心に手を合わせていた。毎年中秋の名月の日に行われる。

神奈川新聞社

政経かながわ

2014 9/23 No.1979

contents

視点・点描 3
激戦区神奈川の伝説再び

講演録 4
「神奈川県の地震危険と備え」
神奈川県地震災害対策検証委員会座長、
元東京経済大学教授　　吉井　博明

社　会 8
豊かさ維持の鍵は「人への投資」
人口減にらんだ自立産業育成を

経　済 10
米国、車社会から「路面電車大国」へ
渋滞緩和、環境対策で注目高まる

政　治 12
特定秘密保護法に懸念消えず
運用基準は部分修正のみ

くらし2014 14
介護2025年問題

広告珍談 16
～いまこそ広告すべき⑦
ムコ殿求む

NNAアジア経済リポート 17

神奈川景気データファイル 18

神奈川景気データファイル 19

事務局だより

◇横浜定例講演会

2014年10月1日（水）
14時～15時30分
横浜情報文化センター　6階
「情文ホール」
講師は株式会社タニタ前代表取締役会長の　谷田　大輔　氏
演題は「タニタの経営論～世界初・家庭用体脂肪計、タニタ食堂　誕生秘話を交えて（仮題）」

視点点描

激戦区神奈川の伝説再び

この夏の高校野球最大の話題といえば、甲子園ではなく明石トーカロ球場で行われた全国軟式選手権だろう。準決勝で延長五十回の大熱戦を制した中京（東海・岐阜）が栄冠を手にして全国の注目を集めた。気の毒だったのは先に決勝進出を決めていたチームだ。中京の陰にすっかり隠れてしまったその学校こそ、南関東代表で初出場した神奈川の三浦学苑だ。

軟式は神奈川を勝つと、埼玉、千葉との南関東大会で全国の代表を争う。神奈川は9年連続で南関東を制しているが、その強さを全国でも発揮したのが昨年の横浜修悠館。初出場で全国選手権を制し、神奈川に勇気を与えた。

三浦学苑も刺激を受けた。昨夏の神奈川大会初戦で敗れた相手の快挙を励みに練習を重ね、この夏の決勝でその修悠館を見事に倒した。軟式は加盟校24校。三浦学苑の優勝で3年連続の初優勝校誕生で、V経験校は15校目だ。頂点を狙えるチームがそれだけあり、どこが出ても県外で強い。理想的な切磋琢磨を繰り広げている。

全国では初戦から2試合連続の延長逆転サヨナラ勝ち。続く準決勝は2―1で逃げ切った。勢いに乗って神奈川勢の全国連覇を狙うはずが思わぬ敵が現れた。

延々と続いた中京―崇徳（中国・広島）は4日目の5イニング目で決着した。準決勝には潤沢な時間が与えられたが、栄えある決勝があおりをまともに食らった。

8月31日を迎え、大会本部は終了が第一。準決勝が延長五十四回で決まらなかったら抽選で勝者を決め、決勝は準決勝と合わせて18イニングで打ち切り。そこで引き分けた場合は「優勝預かりで両校準優勝」になるのだという。

2日間待たされた上に、負けなくても優勝できないかもしれない。三浦学苑の岡村悟司監督（39）は「心が折れそうだった」と振り返ったが、さらに追い討ちをかけたのが球場の雰囲気だった。中京の応援団には準決勝で敗れた崇徳ナインや関係者もおり、大観衆はほぼ相手の味方。そんな「完全アウェー」（岡村監督）を跳ね返すのは並大抵ではなかった。

甲子園の魔物ならぬ「明石の魔物」に振り回されたが、神奈川勢として堂々の2年連続決勝進出。かつて硬式で「神奈川を制する者は全国を制す」といわれた時期があった。来年は深紅の大優勝旗を取り返し、伝説を軟式の世界でよみがえらせてほしい。

（神奈川新聞社運動部長　岡部　伸康）

広告珍談

いまこそ広告すべき⑦

宮野　力哉

ムコ殿求む

★コンカツ広告、前号のつづき。今回はぜんぶムコ求む。

私の娘は16歳にして、色白く、髪は黒く長く候。未だ、男に肌をふれし事なく、中肉にて、在郷には無類と申す評判。学識才知等も、日本婦人にしては可なりあり。

《右に似寄の婿有之候はゞ諸君御世話被下度奉願上候也》という父親は、高橋五郎兵衛さん。山形新聞が掲載したのは１８８２（明治15）年月のこと。

★馬に乗れる、ムコ殿を。

《求婚の女子は左の性格を有するを要す》と、すごい書き出しの婿求むは

キリスト新教を奉ずる者。普通の教育をうけ、英学を修める者。姿やさしく背高く、身体丈夫で、動作活発なる者。馬に乗れる者。乗れなくとも結婚後、乗馬する勇気ある者。家柄・資産の有無を問わず、年齢15歳より25歳にして初婚の者。

87（明治20）年2月、時事新報が掲載。おなじ広告欄にヨメ求むも載った。

★ついに見合い写真

図は１９１３（大正2）年2月、朝日新聞に掲載された。見合い写真入り広告。文章はこうだ。当方、長谷川まつ子。明治29年4月12日生。大至急、結婚いたしたい。ご希望の男子は1週間以内に最近の写真を添えて、東京市京橋区南伝馬町の星までご照会あれ。写真は諾否のいかんにかかわらず、10日以内にご返送申し上げる。

・学歴　帝国大学もしくは早稲田、慶応、明治、日本、国学院など官私立大学卒業の方

・年齢　23歳以上31～2歳まで

・収入　財産は別段に希望はないが、下女1人くらいを使い、中流生活に不自由なき収入

・持参金　金1万円也。ただし10カ年間は当方の名義で銀行預金、利息は化粧料に使用す

・身長　5尺5寸以上、中肉、どちらかといえば肥満して血色よき方

・体質　淋病もしくは梅毒など花柳病にかかっている方……

と、なにやら怪しげになってきた。なんのことはない。淋病の新薬の広告である。写真の送り先は星、すなわち星製薬。つまり広告主。《不束なる私の写真と、ホシゴノールの薬品名をお忘れなきよう》と結んでいる。楽しみながらつくったにちがいない。恐らくは注目度は高かったのでは。だけど、縁組ができたかどうかは不明。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図）星製薬の「求婚広告」１９１３（大正2）年2月掲載